

序

北海道農業は過去一貫して全国への食糧供給の重責を担って発展してきた。また、個々の生産農家は広大な農耕可能地を背景として、大型事業経営を指向して著しく発展してきた。しかし最近になって、漸く規模拡大が停滞し、内面的、質的向上へと転換が余儀なくされてきている。

一方、水稲をめぐる社会情勢はますます厳しくなり、昭和53年度より水田利用再編対策実施要綱が定められ、水稲の作付制限と水田の畑転換に伴う畑作物の積極的導入が図られている。

このような農業情勢下における営農では、適地、適作を基本とし、生産向上のための各種条件の整備が急がれるが、なかでも栽培作物およびその品種の選定は最も重要な課題になると言えよう。

この時に当って、しばらく改訂をみなかった「農作物優良品種の解説」を発刊し、大いに斯界に役立てようと考えた。本書については、昭和2年を初版とし、昭和27年および35年に改訂版を発刊してきた。その後今日に至るまでの約20年間は、道内の農業技術が大きく変革し、作物や品種の変せんもまた激しかった時期に当る。この間に道内研究機関から新たに育成された農作物優良品種は多数にのぼり、さらに奨励品種改廃も各作物について行われてきているので、その後の研究成果を併せて、優良品種解説を中心とした改訂版を刊行することとした。

本書の利活用が、北海道農業の一層の発展を果たす一助ともなれば幸甚である。

昭和54年3月

北海道立中央農業試験場長 島 崎 佳 郎

はじめに

1. 解説には、1961年（昭36）から1977年（昭52）の17年間に、北海道農業試験会議（成績会議）の検討を経て、北海道種苗審議会で優良品種に決定された全品種をとりあげた。
2. 北海道登録品種一覧には、1971年（昭46）に定められた北海道農作物奨励品種登録要領、同準奨励品種記録要領によって、登録（記録）簿に登載ずみの全品種をとりあげた。
3. 内容は、北海道農業試験会議で検討された資料に基づいているが、その後に変更または追加され明らかになっているものは、それに従って書き改めた。ただし、調査項目の用語は作物別に統一したので、最近の調査基準と一致しないところがある。
4. 水稻品種の字体は、1968年（昭43）1月の北海道農業試験会議の決定によって、1957年（昭32）以前の品種は漢字で、1958年（昭33）以降の品種はひらがなで、また、農林省登録品種は従来どおりカタカナで書いた。
5. 北海道立各農業試験場は、1964年（昭39）11月の組織改正によって改称され現在に至っているが、名称は交配、検定、発表などの当時にさかのぼって用いた。

旧 名 称	新 名 称
北海道立農業試験場本場	北海道立中央農業試験場
空知支場	同稲作部
江部乙りんご試験地	同園芸部に統合
岩宇園芸試験地	廃止
渡島支場	北海道立道南農業試験場
上川支場	北海道立上川農業試験場
十勝支場	北海道立十勝農業試験場
北見支場	北海道立北見農業試験場
根室支場	北海道立根釧農業試験場
宗谷支場	北海道立天北農業試験場
天北支場	同天塩支場
原原種農場	北海道立中央農業試験場 原原種農場
北海道立新得種畜場*	北海道立新得畜産試験場
北海道立滝川種畜場*	北海道立滝川畜産試験場

*は1962年（昭37）組織改正

6. 企画・編集担当

手塚 浩 森 義 雄 長 内 俊 一
細貝 節 夫 及 川 寛 尾 上 駿 策
大橋 尚 夫 竹 川 昌 和 田 北 辰 雄

7. 執筆担当 (ABC順)

浅 間 和 夫	ばれいしょ
千 葉 一 美	小豆
細 貝 節 夫	りんご, りんご台木
犬 塚 正	陸稲
加 藤 俊 介	野菜
北 村 亨	ラベンダー, なたね, ライ麦
古明地 通 孝	えん麦, えん豆
国 井 輝 男	除虫菊, 亜麻
松 井 文 雄	ぶどう, オウトウ
三 木 英 一	野菜
峯 岸 恒 弥	なし
三 浦 豊 雄	菜豆
森 村 克 美	水稻
村 松 裕 司	ハイブッシュブルーベリー
仲 野 博 之	とうもろこし
成 田 秀 雄	大麦, 裸麦
野 村 信 史	はっか
及 川 寛	ルタバガ, 飼料カブ
及 川 邦 男	花豆
男 沢 良 吉	てん菜
尾 関 幸 男	小麦
佐々木 多喜雄	水稻
沢 田 一 夫	野菜
白 金 茂	スモモ, モモ, ウメ
砂 田 喜与志	大豆
田 北 辰 雄	水稻, トマト, ユリ
後 木 利 三	大豆
脇 本 隆	牧草
渡 辺 久 昭	カーランツ, グースベリー, きいちご
山 谷 吉 藏	花ゆり, 野菜